

森下翔太選手が阪神1位

硬式野球部を引っ張って



森下翔太選手

もりした・しょうた。神奈川県・東海大相模高卒、商学部4年。182センチ、90キロ。1年春から東都リーグ戦に出場。リーグ・ベストナインに2019年春、2022年春の2度選出。大学日本代表にも2度、選出された。外野手。右投げ右打ち。

プロ野球ドラフト会議が10月20日に開かれ、硬式野球部の森下翔太選手（商4）が阪神1位、北村恵吾選手（商4）が東京ヤクルトの5位で指名された。会見場の多摩キャンパスCスクエアは歓喜にわき、両選手や部員の笑顔が弾けた。
(学生記者 奥田陽太)

待ち望んだ指名

Cスクエア中ホールの会見場は、期待と不安が入り交じる独特の空気に満ちていた。指名を待つ森下、北村両選手は、清水達也監督や樫

山和男部長（理工学部教授）、チームメイトに見守られながら着席。森下選手は少し体を揺すって、マスクに手をかけるなど緊張気味にも見える。それを見た私も張り詰めた空気を感じて身が引き締まった。

1巡目の指名選手の読み上げが始まり、重複指名の抽選を外した阪神、千葉ロッテが2度目の入札へ。どちらかの球団から指名があるという予感があった。指名の瞬間を収めようと報道陣のカメラが一斉

北村恵吾選手は東京ヤクルト5位

きた2人がそろってプロへ



北村恵吾選手

きたむら・けいご。滋賀・近江高卒、商学部4年。182センチ、90キロ。硬式野球部主将。1年春から東都リーグ戦に出場。リーグ・ベストナインに2022年春、2022年秋の2度選出。内野手。右投げ右打ち。

に選手の方に向けられた。

「第1巡選抜希望選手 阪神 森下翔太 外野手 中央大学」

名前が呼ばれると同時に、歓声とシャッター音が響いた。目を細めた森下選手は榎山部長とがっちり握手している。

別室で指名を待つことになった北村選手のもとには約45分後、森下選手の会見が終わりかけたころに東京ヤクルトの指名という吉報

が飛び込んできた。一度は落ち着いていた会見場は再び歓喜に沸く。清水監督も「中大を引っ張った2人がプロに行くことになってうれしい」と笑顔を見せた。

ともに歩んできた2人、ライバルとしてのしのごも

北村選手への指名に、森下選手は「ナイス!」とガッツポーズを決め

た。それもそのはず、2人は北村主将、森下副主将として、2022年春季、秋季の東都1部リーグを戦った。春は2部との入れ替え戦に挑み、「崖っぷち」で踏みとどまるなど、厳しい経験もともにした。北村選手は「大きな壁を乗り越えたことで成長できた」と振り返る。

2人は同じセ・リーグの球団に入り、ライバルとしてのしのごを削ることになる。ともに目標に挙げたのは、2学

年上の牧秀悟選手(横浜DeNA)。寮で同部屋だったことがある北村選手は、結果が出なかった1年生のこ

ろ、背中を押して励ましてもらったと明かした。来春、中大を巣立つ2人にも、後

輩たちの憧れとなる活躍、私たち中大生を元気づけるようなプレーを期待したい。

森下翔太選手、北村恵吾選手はドラフト指名後、報道陣の質問に答えた。主なやり取りは次の通り。

「新人王を取りたい」 「球界を代表するバッターに」

質問(以下Q) 指名されて現在の心境を教えてください

森下選手 正直びっくりしている部分が多い。素直に1位指名をうれしく思います。1位に恥じないプレーをして自分らしさを出して頑張っていきたい。

Q 阪神という球団はどのような印象か

森下選手 どこよりもファンの方々の熱い球団。それに負けない熱さをもってプレーしたい。

Q 阪神の本拠地の甲子園球場にはどのような印象を持っているか

森下選手 (高校時代は)1回しか

出場していないが、(本塁打を打てずに)良い印象が残っていない。悪い思い出を塗り替えるようなプレーをしたい。

Q プロとしての目標を教えてください
森下選手 最初の目標は新人王。将来は球界を代表するバッターになって三冠王を取り、「侍JAPAN」のユニフォームを着られたら最高です。

Q 多摩キャンパスで気に入っている場所はあるか

森下選手 (少し考えこんで)8号館にはよく行きました。行き慣れている場所でしたね。

「気合のこもったプレーをしたい」 「打点王を取る」

Q 指名を受けて現在の心境を教えてください

北村選手 ほっとした気持ちが一番大きい。(大学卒業までの)残され

た期間にしっかり練習を積んで、1年目から結果を残したい。

Q 東京ヤクルトの印象は
北村選手 去年、今年と2年連続で日本シリーズに出ており、目の前の一戦に懸ける思いの強いチームだと思います。

Q 森下選手にライバル心はあるか
北村選手 4年間、同じ練習をしてきた仲。ライバルというより、ともに切磋琢磨して高め合う仲間になったらいいなと思います。

Q プレーでここを見てほしいと思うところは

北村選手 気合のこもったプレーです。学生野球のように目の前の一戦に懸ける気持ちを、プロの長丁場の戦いでも出していきたい。コンスタントに打率を残せるバッターになり、そして打点王を取りたいと、ずっと思っています。



ドラフト指名後、森下、北村両選手は応援団のエールを受けた▲

編集後記

プロでも 熱いプレーを 中大魂で頑張れ!



学生記者から応援エール・メッセージ

会見での質問が良い経験

奥田陽太(経済2)

記者会見場のCスクエアに入ると大勢の記者やカメラの列が目に入り、席には指名を待つ森下、北村両選手と、2人を見守る硬式野球部員が真剣な面持ちで座っている。プロの記者も集まる場に同席するのは初めての経験で私も少し緊張していた。選手が指名され、会見が始まると、誰もが耳にしたことのあるメディアの記者が質問を繰り返していた。

そんな中で質問するのは気が引けたが、思い切って手を挙げて質問できたことは良い経験になった。笑顔で部長と握手を交わす選手、たかれるフラッシュ、仲間の喜びの声。全てが得も言われぬ瞬間だった。これからの2人の活躍を心から期待したい。指名されたのは私のひいきの球団ではなかったのだが…。

記者の「聞き出す力」「引き出す力」に圧倒される

島田莉帆(文2)

指名の瞬間、会見場に温かい拍手が鳴り響いた。森下選手は清水達也監督からの「おめでとう!」の言葉に笑顔を見せ、朗らかな表情で質疑応答に応じた。北村選手はキャプテンらしく、凛々しく真剣な表情で言葉を紡ぎ、仲間が加わると、大学生らしい和気あいあいとした姿を見せてくれた。記者の方々は一瞬一瞬を逃さないよう常にカメラを向け、2人の魅力や特長を最大限に引き出すような質問を会見で重ねた。私はその「聞き出す力」「引き出す力」に圧倒され、プロの仕事のすごさを感じた。

2人の選手が夢を実現させる、その瞬間を目にすることができ、胸がいっぱいになった。2人の活躍を心から祈るとともに、同じ中大生として恥じないよう、私も夢に向かって挑戦し続けたい。

努力の積み重ね

「一日を大切にする生き方」

影原風音(文2)

学生記者として初めての取材で胸が高鳴った。全てが新鮮で貴重な経験となった。質疑応答で、「自分を動物にたとえたら何ですか」という私の質問に、森下選手から「ライオン」と言葉が返ってきたときは、少しドキッとした。タイガース(虎)に指名されたからだ。ならば、森下選手には虎の本拠地、甲子園で「獅子奮迅」の活躍を願おうと思った。

森下選手は強気な受け答えが印象的で、北村選手は静かに闘志を燃やすタイプに見えた。2人に共通するのは、一日を大切にしていることだ。日々の努力の積み重ねを大切にしていたことで、東都リーグの春の入れ替え戦も、自分たちを信じて「あとはやるだけ」と試合に挑めたという。私も目の前の一つひとつのことに全力で向き合っていきたいと感じた。

仲間と喜ぶ姿、私も幸せな気持ちに

三浦菜々花(国際経営1)

小さい頃から大好きな野球。私も少年野球チームでプレーし、プロ選手を目指したことがあった。土に汚れながら互いに本気でプレーする姿が格好良く、高校生の甲子園大会はテレビにきぎ付けた。だから、当時テレビで見ていたような選手のプロ入り決定の瞬間に立ち会えたことは夢のようだった。

硬式野球部の雰囲気や明るさが記憶に残っている。部活でずっと一緒に「青春してきた」仲間ならではの絆を感じられた。報道陣の求めに応じた写真撮影の間、カメラの向こう側にいる部員たちを見て、笑顔でポーズをとる森下、北村両選手の姿が印象的だった。部員全員が2人のプロ入りの喜びを分かち合う様子は、見ているこちらまでも幸せにしてくれた。またその熱さに改めて野球の魅力を感じた。



森下、北村両選手(後列中央)と写真に納まる学生記者の8人

「ダブル指名」の裏で見えた覚悟と自信

塚山泰瞬(商2)

まさに、感動の瞬間だった。森下、北村両選手がともに指名を受けたとき、会場全体が大きな祝福の歓声と拍手に包まれた。学生記者になってまだ間もない自分にとって、今回の会見は初めてにして最高の体験となった。大勢の記者の方々、鳴り止まないシャッター音、指名を受けた2選手の安堵の表情。普通の大学生活では味わえなかったであろう経験だった。

会見で印象に残ったのは、安堵の表情の中に、どこか余裕のようなものを感じたことだ。2人とも「三冠王」「打点王」とそれぞれ具体的な目標を掲げていた。プロになる覚悟と自信。すでに目は次のステップに向いているということを感じ取れた。2人ともセ・リーグの球団からの指名。切磋琢磨して、セ・リーグを引っ張るような存在になってほしい。

笑顔のガッツポーズに見えたナインの絆

海老澤英奈(文2)

学生記者として初の取材となったドラフト会議の記者会見。たくさんの取材陣が駆け付けた、ビリビリする独特の雰囲気、私の胸にも少しばかりの緊張感と、これから活躍する選手の門出を目撃できるかもしれないという、うれしさが入り交じっていた。

何より喜ばしいのは、森下、北村両選手がともに指名されたことだ。先に指名された森下選手は会見直後の壇上で、北村選手への指名を仲間から知らされ、笑顔でガッツポーズをした。両選手の、硬式野球部員たちの絆が垣間見えた瞬間だった。会見で2人が目標の選手に挙げたOBの牧秀悟選手(横浜DeNA)を含め、3人がセ・リーグ球団の所属となる。憧れの先輩、切磋琢磨した仲間と競い合う日を中大生として心待ちにしている。

「夢をつかむ」その瞬間を目撃

酒井優美(商1)

将来の夢を聞かれ、「プロ野球選手」と答える野球少年はたくさんいるだろう。だが、夢を実現できるのはほんのひと握りの人だ。森下選手と北村選手はドラフト指名にたどり着くまでに、私たちには想像もつかない努力を重ねてきたと思う。時には壁にぶつかり、決して順風満帆な野球人生ではなかったのではないだろうか。

中大応援団のエールを受けた後、北村選手が指名されたことを知った森下選手は会見場の壇上でガッツポーズを見せた。自分が指名されたときよりうれしそうだった。4年間、同じ道を目指した仲間を心から祝福する笑顔だった。学生記者として初めての取材で、2人の選手が夢をつかんだ瞬間を見ることができたのは、とても貴重な経験だった。

指名の瞬間のフラッシュに驚き

「ずっと応援したい」

小西結音(総合政策1)

私自身、初めて報道関係者の仕事ぶりを間近で見て、森下選手が阪神に1位指名された瞬間のフラッシュの多さには本当に驚いた。記者会見中からパソコンに記事を打ち込む真剣な姿には、記者職という仕事への熱意を感じた。

会見で、森下選手は精神面の成長や、常に自然体でひたむきに努力をしてきたことなどを語り、少し時間が経って、北村選手も指名されたこと知った瞬間にガッツポーズを見せた。ともに成長してきた2人の強い絆を感じた。カメラマンの撮影に快く応じる姿には、野球や学生生活に打ち込むことで培われた大らかな人柄が表れていたと思う。2人の思いを直接聞けたのはとても貴重だった。活躍をずっと応援していきたい。



スポーツそれも個人種目で日本一、インカレ王者に輝くような人は、幼少期からほぼ負け知らずだろうという勝手な思い込みがあった。陸上日本選手権(2022年6月12日)の男子800メートルで優勝した金子魅玖人選手(商3)は違った。もちろん中距離ランナーとしての素質、下地は肉体に秘められていただろうが、努力し、悩み、苦しんで、国内の頂点に立った。

不思議な感覚 「前にだれもないぞ」

日本選手権の決勝。中大1、2年時は準優勝に終わっていた。「どの大会よりも勝ちたい」と、今度こそその思いで挑んだ。ラスト300メートルで仕掛け、残り150メートルでも余力があった。4コーナーを回ってスパートというプラン通りの強いレースを見せた。

ライバルたちを寄せ付けず、両手を高く上げてフィニッシュ。最後の直線では「前にだれもないぞ、という不思議な感覚」を味わった。さまざまな大会で優勝しているが、やはり日本選手権で先頭でゴールするの

は格別な経験だった。

800メートルは、選手間の駆け引きや位置取りが勝負を大きく左右し、実力者でも必ず勝てるという種目ではないという。位置取り争いの激しさから、1500メートルとともに「トラックの格闘技」とも呼ばれる。

金子選手は「走破タイムを上げていく以外の強さを磨いていかないと本当の強さは身につかない」と話す。タイム以外の強さとは戦術であり、レース経験の積み重ねがものをいう。

「頑張って1位になる」 素晴らしさ

「頑張って1位になることは、こん

なにもうれしいんだ」。陸上人生の原点は小学校時代にある。マラソン大会で絶対に勝てなかった強敵の壁を、6年生のときに初めて越えた。父親と一緒に走りを重ね、練習に打ち込んだ成果だった。「努力を積み重ねて勝つ素晴らしさ、喜びを知った。努力すれば結果はついてくる」。そんな思いが胸を満たした。

ところが、貧血が原因で、中学から高校2年の冬ごろまで陸上選手としてどん底を味わう。不調が続いて思うように走れず、陸上を続けるかどうかすら悩んだこともあったが、貧血にしっかり対処できるようになると、高3のインターハイは800メートルで2位、国体では優勝することが

「見る人が頑張ろうと

思う理由になる走りをする」

800メートル日本王者

陸上競技部 金子魅玖人選手(商3)

できた。

中高時代を思い返すと、現在の成長した自分は「予想もしていなかった姿。考えてもいなかった姿」に見えるという。

「世界と戦える選手になる」

日本王者の地位に満足せず、世界と戦える選手になることを目指し

ている。「こんなにきつい種目なのにあまりに注目されていない」という国内の現状を変えるため、五輪や世界選手権の舞台で活躍する姿を見せて、「800メートルへの関心を高めて盛り上げたい。800という種目の競技人口を増やし、裾野を広げたい」という思いが強い。

取材の最後に「きついのになぜ走るのか」とストレートに尋ねた。

「きつい姿を皆が応援してくれる。走りが世界レベルに達すれば、皆に（自分も）頑張ろうと思ってもらえる。そう思ってもらうために僕も頑張る。誰かの頑張る理由になるような走りをしたい」

まっすぐな目と、返ってきた言葉に胸が熱くなった。



日本選手権の表彰台で笑顔を見せる金子魅玖人選手(中央) ▲

想定外のレースでの反省と学び

駆け引きや戦術が重要視される800メートルで、想定外の意外なレース展開となって敗れてしまった場合、金子魅玖人選手は反省点を突き止め、次回以降のレースに生かすという。

2022年10月の国体では、1周目のペースが遅く、いつもラスト300メートルでペースを上げる選手が残り400でスパートし、追いつくことができずに2着に終わった。「(調子が悪いなどの理由で)自信がないと後手を踏み、引き離されて追いつけない」というレースも経験した。このため、自信をもってレースに挑むことを、常に頭に思い描いているという。

圧倒的な力量差があれば、終始先頭で走り、そのまま後続を突き放してゴールするのが理想だ。金子選手は「国内で負けない力がつけば、そういうレースができる」と話している。



金子魅玖人選手

かねこ・みくと。千葉・鎌ヶ谷高卒、商学部3年。176センチ、62.5キロ。自己ベストは800メートルが1分45秒85、1500メートルは3分41秒15。2022年6月の日本選手権男子800メートルで初優勝。今年の日本インカレは2位だった。2023年のハンガリー・ブダペストでの世界選手権(世界陸上)800メートルの参加標準記録1分44秒70の突破が当面の目標。

第106回日本陸上競技選手権大会

(2022年6月12日、大阪・ヤンマースタジアム長居)

〈男子800メートル決勝〉

順位	氏名	大学	タイム
1	金子 魅玖人	(中央大)	1分47秒07
2	薄田 健太郎	(筑波大)	1分47秒42
3	根本 大輝	(順天堂大)	1分47秒49



強心臓、堂々の金メダル



U20世界選手権 4×100メートルリレーで

陸上競技部 藤原寛人選手(法2)

「国を代表して戦うんだ」。日の丸を背負ってつないだリレーは重みが違った。U20世界選手権4×100メートルリレー(2022年8月5日=コロンビア現地時間)で、2走として出場した陸上競技部の藤原寛人選手(法2)を含む全員が、ミスなくバトンをつなぎ、日本勢初優勝の快挙を成し遂げた。メンバー4人の快走は、現地でバトンリレーを確認できたのが本番前日の一日だけという不安も全く感じさせなかった。

「ワクワクして楽しかった」



優勝

日の丸を背負って走る

南米コロンビア・カリの地で世界の頂点に立ったメンバーは、藤原選手と、1走の池下航和選手(環太平洋大2年)、3走の館野峻輝選手(東洋大1年)、アンカーの柳田大輝選手(東洋大1年)の4人。藤原選手は2022年6月のU20日本選手権100メートルでの優勝を評価されてメンバー入りした。メンバーの顔ぶれを見て「4人の力量なら金メダルが取れる」と確信していたという。

ただ、この4人でバトンをつなぐのは初めて。しかも現地の事情からバトン受け渡しの練習は前日だけと不安もあった。そして、予選は

トップ通過したものの、決勝は南アフリカの後塵を拝して2位でフィニッシュ。「2番だったか」と少し肩を落としてトラックを一周していたところ、日本チームのスタッフから、コース侵害による南アフリカの失格で、日本が繰り上げ優勝と聞かされた。その瞬間、感情が高ぶり、4人で抱き合って喜んだという。

大きな舞台で国を代表して競うことについて、藤原選手は「プレッシャーよりも、やってやるぞというワクワクする気持ちのほうがまぎった」と振り返り、「僕はプレッシャーを楽しめるタイプ。観客が大勢いたほうが楽しいと、コロナ禍があつて気づいた」と頼もしく言い切る。



U20世界選手権4×100メートルリレーの優勝メンバー▲
(左から2人目が藤原寛人選手)

個人種目の100メートルに出場した藤原寛人選手(左から2人目)▲

レース中盤の 加速力が持ち味

U20世界選手権には100メートルの自己ベスト(10秒37)を更新しようと意気込み、個人種目にも出場した。予選は自己ベストにあと100分の4秒と迫る10秒41で2位通過したが、展開で後手を踏んだ準決勝で涙をのんだ。100メートルは9秒91から10秒30までの8人が決勝に残るといふ「過去最高レベルのジュニアの競走」(藤原選手)となった。

短距離ランナーとしての特長は中盤以降の加速力だ。「前半30メートルで出遅れさえしなければ勝てる」と力を込める。走力を爆発させる後半にエネルギーを温存する戦

い方だ。

100メートルは1000分の1秒差で明暗が分かれる世界。「試合場が静まり返るスタートのドキドキ感や緊張感。それまで取り組んできたことを10秒足らずの間に全て出す。何の言い訳もできない競走」と、短距離走に打ち込む理由、魅せられる心境を語る。

OBの飯塚翔太選手 からの学び

2023年のユニバーシアード出場、2024年パリ五輪出場が在学中の目標。それに近づくための中大での練習環境も充実しているという。

大学1年のシーズンオフのころか

ら、週2回、ウエートトレーニングだけの日を設け、本格的な体作りに取り組んでいる。ウエートの次の日のトラック練習では「体が動き、スピードも出ている。自信につながる」と効果を実感した。

また、このころから、陸上競技部OBの飯塚翔太選手(ミズノ)と練習をともにする機会に恵まれた。2016年リオ五輪4×100メートルリレー銀メダリストの先輩から、練習への姿勢や、走ることを柔軟にとらえて取り組む大切さなどを学ぶ。競技の面でも人としても、飯塚選手に見習うべき点が多いと感じている。この年末も合宿に同行する予定という。

◇第19回U20世界陸上競技選手権大会

男子4×100メートルリレー決勝
(2022年8月5日=コロンビア現地時間)

順位	国名	タイム
1	日本 (池下航和、藤原寛人、館野峻輝、柳田大輝)	39秒35
2	ジャマイカ	39秒35
3	米国	39秒57

2023ユニバーシアード、 2024パリ五輪出場が目標

藤原寛人選手

ふじわら・ひろと。千葉・東海大浦安高卒、法学部2年。180センチ、72キロ。100メートルの自己ベストは2022年6月のU20日本選手権(予選)で記録した10秒37。中大在学中の目標を2023年のユニバーシアード出場、2024年のパリ五輪出場に置いている。国内に生息する淡水魚が好きで、寮近くの川で釣りをして気分転換を図るといふ。



「練習を頑張ったからこそ
本番も頑張れる」



選手の頑張りを映像に記録

FLP村井ゼミ制作のモチベーションビデオ 今季は一般公開

陸上競技部長距離ブロック(駅伝)チームに大会に向けた意欲や士気を高めてもらおうと、村井剛・法学部准教授のFLPゼミが毎年制作しているモチベーションビデオ(MV)が、今季は一般に公開される。出雲駅伝(10月10日)のMV2本をすでに公開、箱根駅伝のMVは開催直前の2022年末に公開する。選手たちに見てもらおうほか、陸上競技部のインスタグラムで視聴できるようにするという。

駅伝モチベーションビデオを作った村井ゼミ駅伝班のメンバー▶





出雲駅伝で3位のフィニッシュテープを切る吉居駿恭選手 ©Getsuriku



出雲駅伝4区で区間3位の力走を見せた阿部陽樹選手 ©Getsuriku



モチベーションビデオを見る陸上競技部の選手たち

「走らない選手の 頑張りも伝える」

「エントリーメンバーの映像が中心ですが、残念ながらエントリー外となった選手の映像もたくさん使いたい。走らない人の頑張りも伝えたい」

スポーツ・健康科学の分野について学ぶ村井ゼミで、MVの制作に携わっている原田怜奈(れな)さん(総合政策3)が言葉に力を込める。出走できなくても、選手たちが駅伝に懸けてきた思いを映像で伝えたいという。

MVは、多摩キャンパスでの練習風景を撮影した映像や、インカレなど今年前半のトラックの大会の映

像、長距離ブロックが提供してくれた映像などと、静止画(写真)を素材に制作している。バリエーションを持たせるため、トラック練習の集団走の足元だけにスポットを当てた映像なども織り交ぜる。箱根のMVには監督や選手のインタビューも盛り込みたいという。

監督、選手から 映像に要望も

ゼミの授業中に訪れた藤原正和監督や選手、マネジャーから、ムービーの内容について要望を受けることもある。今年はけがや故障、体調不良などで苦労を重ねた4年生が例年以上に多く、藤原監督から「4

年生にフォーカスした映像をお願いしたい」と言葉をかけられたという。

MVを見た選手たちからは、これまでも「これだけの練習をして頑張ってきたからこそ、本番でも頑張れる」という熱い思いをよく耳にしてきた。選手たちに今度もそう思ってもらいたいという意識を忘れずに撮影や編集作業にあたっているという。

コロナ禍がより深刻だった昨季は、長距離ブロックの合宿に同行できるゼミ生の人数も限られ、素材となる映像も不足気味だった。今季は状況が改善し、素材が集まりやすくなっている。正月に向けて最終調整に入る選手たちと同様、ゼミ生たちもMVの完成に向けて急ピッチで作業を進めている。



©Getsuriku

新春の箱根へ 期待膨らむ

出雲3位、全日本7位

陸上競技部長距離ブロック(駅伝)チーム

中央大学陸上競技部長距離ブロック(駅伝)チームは、9年ぶりに出場した10月10日の出雲駅伝で3位に入り、11月6日の全日本大学駅伝対校選手権も前年(8位)に続いて7位でシード権を獲得。大学の三大駅伝のうち2大会で上位進出を果たした。全日本では吉居大和選手(法3)が6区(12.8キロ)で区間新記録(37分01秒)の快走を見せた。

駅伝チームが最大の目標として照準を定める正月の箱根駅伝まであと1カ月余り。上昇ムードで挑み、前年の総合6位を上回る成績をと期待が膨らむ。

第34回出雲全日本大学選抜駅伝競走 結果

(2022年10月10日、出雲大社-出雲ドーム)

順位	大学名	記録
①	駒沢大	2時間08分32秒=大会新
②	国学院大	2時間09分24秒
③	中央大	2時間09分48秒
④	青山学院大	2時間10分18秒
⑤	順天堂大	2時間10分50秒
⑥	創価大	2時間10分52秒
⑦	法政大	2時間11分54秒
⑧	東京国際大	2時間11分59秒
⑨	東洋大	2時間13分35秒
⑩	関西学院大	2時間14分27秒

(上位10校)

●中央大選手 区間成績●

区間	選手名	記録
1区(8.0キロ)	吉居大和	22分32秒①
2区(5.8キロ)	千守倫央	15分41秒③=区間新
3区(8.5キロ)	中野翔太	24分12秒⑦
4区(6.2キロ)	阿部陽樹	18分16秒③
5区(6.4キロ)	溜池一太	19分14秒②
6区(10.2キロ)	吉居駿恭	29分53秒④

(丸数字は区間順位)

秩父宮賜杯 第54回全日本大学駅伝対校選手権 結果

(2022年11月6日、熱田神宮-伊勢神宮)

順位	大学名	記録
①	駒沢大	5時間06分47秒=大会新
②	国学院大	5時間10分08秒=大会新
③	青山学院大	5時間10分45秒=大会新
④	順天堂大	5時間10分46秒=大会新
⑤	創価大	5時間12分10秒
⑥	早稲田大	5時間12分53秒
⑦	中央大	5時間13分03秒
⑧	東洋大	5時間13分10秒
⑨	明治大	5時間15分29秒
⑩	東海大	5時間16分01秒

(上位10校、8位まで翌年出場のシード権)

●中央大選手 区間成績●

区間	選手名	記録
1区(9.5キロ)	千守倫央	27分13秒③
2区(11.1キロ)	山平怜生	32分58秒⑩
3区(11.9キロ)	吉居駿恭	34分21秒⑧
4区(11.8キロ)	中澤雄大	34分37秒⑧
5区(12.4キロ)	若林陽大	36分36秒⑥
6区(12.8キロ)	吉居大和	37分01秒①=区間新
7区(17.6キロ)	湯浅 仁	51分39秒⑩
8区(19.7キロ)	阿部陽樹	58分38秒⑧

(丸数字は区間順位)

水泳部 井本一輝選手(法3)
インカレ自由形2冠 男子400、1500メートルを制覇

「中大最強！」 勝利の雄たけび



400メートル自由形で勝利のガッツポーズ

井本一輝選手

いもと・いつき 大阪・四條畷学園高卒、法学部3年。イトマン東京所属。174センチ、68キロ。高校3年のインターハイ1500メートル自由形で優勝。大学1年のジャパンオープン400メートル自由形優勝。自己ベストは400メートル自由形3分48秒71、1500メートル自由形15分08秒12。世界の舞台での活躍とともに、「水泳部の一人ひとりが自己ベストを更新してのインカレ総合優勝」を目指している。

水泳部の井本一輝選手(法3)が2022年8月の日本学生選手権男子400メートル、1500メートルの自由形2種目で優勝し、2冠を達成した。さらに成長、進化を遂げ、2023年世界水泳、2024年パリ五輪という世界の舞台での飛躍を誓っている。 **学生記者 三ッ巻奈央(法4)**

仲間の声援が ラストスパートを後押し

「中大最強!」。勝利の雄たけびが、インカレ会場の東京辰巳国際水泳場に響いた。水泳部に受け継がれてきた優勝時の伝統の声出だ。

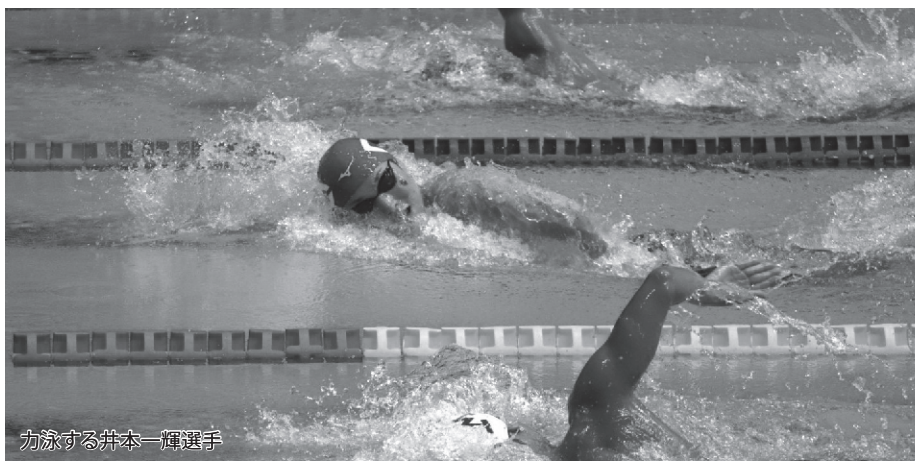
決勝進出選手の持ちタイムを比べると、自己ベストを出しても表彰

台に上がれるかどうかという力関係で挑んだ400メートル。ラスト100で先頭に躍り出ようとした息継ぎのタイミングで、観客席で応援する水泳部の仲間の姿が目に入った。「みんな、優勝するとは思っていなかったのか、盛り上がり方が違った」と笑顔をみせ、声援に感謝する。

周りを気にせず自分のペースを

守ったことが勝利に結びついた。持ち前のスピードと、後半の持久力を生かして粘り、自己ベストの更新(3分48秒71)という会心の泳ぎとなった。

ただ、より得意な距離で、「優勝して当たり前」という強い気持ちで臨んだ1500メートルは、2位に13秒余りの大差をつけたが自己ベストを更新できなかった。うれしさと悔し



力泳する井本一輝選手



表彰式後、誇らしげに盾を掲げる井本一輝選手(中央)

さが胸に入り交じったという。

持久力とスピードを併せ持つ強さ

兄の影響で3歳のときに水泳を始めた。中学生のころ、当時のコーチに持久力を見込まれて、勧められたのが長距離を専門とするようになったきっかけ。泳ぎの特長は、体の大きな上下動を活用して前進するギャロップ泳法で、持久力に加え、後半に追い上げるスピードも持ち味だ。長距離を得意とする国内選手の中では「一番スピードがある」と自負し、井本選手のように200メートルを1分48秒台で泳げる選手は国内では数少ないという。

屈強な体格の選手が多い400メートルと、持久力勝負で細身の選手が多い1500メートル。井本選手

は、適性や求められる体格などの異なる2つの距離に対応できる、総合的な泳力の高さを兼ね備えたスイマーといえる。主に1500に照準を合わせた練習、体力づくりを主眼として、「泳いで筋力をつける」ことを意識している。1回2時間の練習を週8回行い、一度に泳ぐ距離は6~7キロに及ぶ。

2023年世界水泳、2024年パリ五輪へ

モチベーションの源となるのは「優勝したとき、自己ベストが出たときの喜びを知っている」ということ。「練習はきつい。でも、それ(喜び)をもう一度味わいたくて頑張れる」と話す。

インカレから3カ月、「しんどいところで耐える力」を培おうと、心新た

にひたむきに練習に取り組む。目標の選手は短水路1500メートルの日本記録保持者、竹田涉瑚選手。一定のペースでばてることなく泳ぎ続けられる竹田選手の圧倒的な持久力を見習いながら、一緒のプールで練習を重ねる。

2023年7月に福岡で開催される世界水泳の代表選考会(同3月)に照準を絞り、400メートルでは前半のスピード力の強化、1500メートルは中盤の500~1000メートルで落ちやすいペースをいかに保つかを課題に挙げている。

世界水泳を足がかりに、その先に見据えるのは、5つの輪に象徴される大舞台だ。「2024年のパリ・オリンピック代表になるのが最大の目標です」。水泳と真摯に向き合う井本選手の目に、世界に挑む強い覚悟と気迫が満ちあふれていた。

第98回日本学生選手権水泳競技大会

《男子400メートル自由形》(2022年8月29日、東京辰巳国際水泳場)

順位	氏名	大学	タイム
1	井本 一輝	(中央大)	3分48秒71
2	田淵 海斗	(明治大)	3分49秒91
3	黒川 紫唯	(近畿大)	3分50秒36

《男子1500メートル自由形》(2022年8月31日、東京辰巳国際水泳場)

順位	氏名	大学	タイム
1	井本 一輝	(中央大)	15分14秒59
2	本山 空	(新潟医福大)	15分28秒14
3	庭野 直樹	(明治大)	15分28秒77